

プロジェクト実践

国語「人に伝わる文章って？～Yomokka！の感想機能で交流しよう～」

小3年2組

実践者 高須みどり

ア. 活動の構想

(ア) 子どもの実態

今年度の4月から受け持った児童たちである。低学年では、自分たちの願いややりたいことと学びとを結びつけながらのびのびと学習に取り組んできた。そのため、好奇心旺盛な児童が多く、どの子も3年生での新しい学びや活動に取り組む意欲が高い。

読書も大好きで、週に一度のメディアセンター（学校図書館）の時間を楽しみにしている。メディアセンターでは、毎回、宮崎司書による読み聞かせがあり、本の感想を読書ノートに記入している。この読書ノートを担任に提出してから、自分の好きな本を探してきて自席で読書をする。児童たちの多くの感想は「（登場人物）がかわいかった。」、「さいごはすっきりしました。」など自分の考えの理由の説明もなかった一文で、あえて厳しい言い方をすれば雑に書いて終わっている。主語（中心人物または登場人物）や重要な出来事などが書かれておらず、後に読み返したとしても、本の内容や一体何に心を動かされたのかが自分自身にも詳しく伝わってくるような丁寧な感想になっていない。何より、何故そのことが強く心に残ったのか、理由が書かれていないため、本当に一番伝えたいことなのかが伝わってこない。

もともと読む力や文章を書く力の高いほんの数名の児童は、主語（中心人物または登場人物）や重要な出来事、そのことが強く心に残った理由が分かるような丁寧な感想を書けている。しかし、丁寧な感想を書いていない児童も、読む力や文章を書く力が全く身に付いていないわけではない。課題は、教師と児童の両方にあるだろう。教師の側の課題は、感想を書く時間を十分に確保できていないことと、読書ノートに感想を書いて記録を蓄積することの良さを児童と共有できていないこと。児童の側の課題は、感想を書くことの目的意識や、誰のために書くのか相手意識を持っていないことだと担任は捉えている。

読書ノートには、すぐ手に取れて目に見える形で自己の読書の記録が蓄積されていく。記録の蓄積は児童の達成感や満足感を高め、読書への意欲向上につながり、読書生活をさらに充実させてゆくと考えられることから、児童たちにとって価値のある活動と言えるだろう。だが読書ノートへの丁寧な感想の記入を強いることは、児童によっては読書への意欲低下を招く可能性がある。そして現在本校ではコロナ禍の影響で、休み時間中のメディアセンターへの自由な出入りが制限されており、学校で自由に、好きに読書に親しむ時間が十分に保証されているとはいえない状況である。丁寧な感想の記入を強制したくないが、担任として読書ノートの質の向上への願いがある。週に一度の読書に没入できる時間は十分に確保しつつ、感想の書き方についての学びをクラス全員で作っていきたいと考えている。

(イ) 本実践のねらい

そこで本実践では、電子書籍 Yomokka！（ポプラ社）の「みんなのランキング」コーナーや感想欄を活用することを通して、児童に、本を読んだ感想を目的意識と相手意識をもって丁寧に表現することの良さに気付かせることをねらいとする。児童に、楽しみながら Yomokka！に感想を書く経験を重ねさせることで、メディアセンターでも読書ノートに丁寧に感想を書こうとする態度を育みたいと考えた。

単元の導入は、「修飾語を使って書こう」（光村図書 3年下）を教材に、主語・述語の関係や修飾・

被修飾の関係などの文についての学習である。未来の自分を含めて、人に伝わる文章とはどのような文章かということを考える活動を通して、これまでに自分が書いた読書ノートの中の文章について振り返らせる。この活動と並行して、メディアセンターとは別に教室で一人一台のパソコンを用い Yomokka! での読書を行い、ランキング機能の活用から感想欄に書かれている内容に意識を向けさせていく。感想欄は竹早小学校の他の児童も閲覧できるようになっているため、友達と読み合う時間を設けることで自分の書いた感想も校内の知人に読まれることを意識できると考えた。また、友達と互いの感想について交流する場を設けることで、互いの感想の良さや違いを知り、本を読んで感想を書くための観点を児童自らが見つけていけるようにしたい。

イ. 活動の計画（全9時間+メディアセンターの時間）

（ア）活動計画

次	時	○学習活動（国語の時間）	◇留意点 ◆評価
1	1	○「花が、咲きました。」という文に修飾語を足して、様子を詳しく説明する。	◇修飾語を色分けしながら板書しておく。 ◆主語・述語、修飾・被修飾の関係について理解している。
	2	○Yomokka! で読んだ本の中から好きな本を選び、「みんなのランキング」コーナーに投稿する。	◇ランキングの画面をスクリーンに投影し、全体で共有する。
3	○第1時に続けて、修飾語を考えて発表し、修飾語を分類する。 ・いつ、どこで、どのように、いくつ、など。	◇教師から5W（いつ・どこで・だれが・なにを・なぜ）2H（どのように・いくつ）を示す。 ◆文章を読んで理解したことに基づいて、感想や考えを持つことができる。	
4	○これまで修飾語がよく使えていなかったのはどのようなときか、振り返る。 ・日記、学習感想、読書ノート、など。		
5	○Yomokka! で、自分の好きな本を読み、感想を書きこむ。 ○「みんなのランキング」コーナーや感想欄を読み合う。		
【メディアセンターの時間】			
○『かたあしだちょうのエルフ』の読み聞かせを聞き、Yomokka! に感想を書き込む。 ◇Yomokka! ではなく、読書ノートに書いても良いことにする。			
6	○あらすじと感想の違いを確認する。 ・感想には、5W2Hのほかに、書いた人の気持ちが書かれている。	◇友達の書いた感想を、5W2Hの観点に沿って読んでみる。 ◆一人一人の感じ方の違いに気づくことができる。	
7	○Yomokka! に書き込んだ、『かたあしだちょうのエルフ』の感想を、みんなで読み合う。 ○『子うさぎましろのお話』の読み聞かせを聞き、感想をYomokka! に書き込む。		

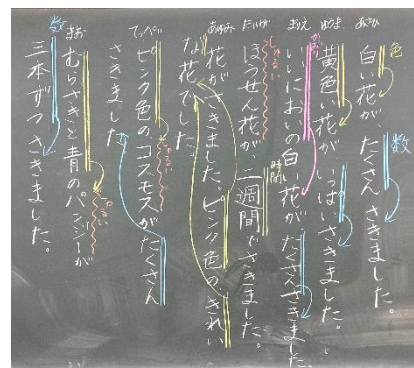
2	8 (本時)	○Yomokka!で友達の書いた『子うさぎましろのお話』の感想を読む。 ○ほかの人がそのお話が読みたくなるような感想とはどのような感想か考え、共有する。 ○共有した内容を、感想を書くための観点としてまとめる。	◇タイピングが苦手な児童は読書ノートに感想を書いてもよいことを伝える。 ◆友達の感想を読み、5W2Hの観点や自身の体験と結びつけて感想や考えを書いている言葉に気付くことができる。
		9	○Yomokka!で好きな本を読み、感想を書くための観点到に沿って感想を書きこむ。 ○友達の書いた感想や「みんなのランキング」コーナーを参考にして、読みたい本を決める。
【メディアセンターの時間】 ○司書の読み聞かせを聞き、感想を書くための観点到に沿って読書ノートに感想を書く。 ◇観点を印刷したプリントを予め配付し、読書ノートに貼っておくようにする。 ◇感想を記入する時間を決めておき、間に合わない場合は自宅に持ち帰って書いてきてもよいことにする。			

(イ) 本時までの単元の経緯

1時間目 『人に伝わる文章って?』～修飾語を使って、文をくわしく書こう～

教科書の教材「修飾語を使って書こう」(光村図書 3年上)から、「花が、さきました。」という一つの文を、児童たちがそれぞれの考えで詳しく書き換えていく活動をした。以下、児童たちと共有した言葉で詳述する。

主語の「花が、」に対しては「白い」, 「黄色い」, 「ピンク色の」など色を表す言葉と, 「ほうせん花」, 「パンジー」など種類を表す言葉, また「いいにおいの」, 「きれいな」などの様子を表す言葉が修飾語になることを共有した。



述語の「さきました。」に対しては, 「たくさん」, 「いっぱい」, 「三本ずつ」などの数を表す言葉と, 「二週間で」という時間を表す言葉が修飾語になることを共有し確認した。児童たちはこれらの修飾語を付け足すことで, 文に表現されている様子が頭の中で想像しやすくなる良さがあることに気付いていた。

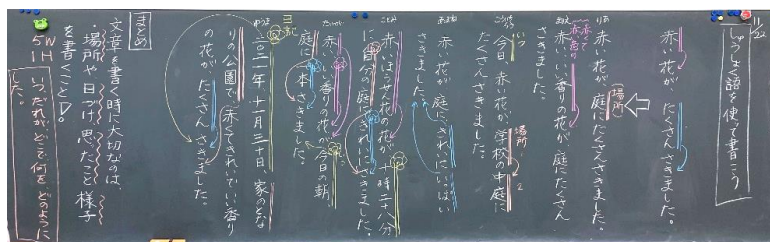
2時間目 Yomokka! (ポプラ社)で好きな本を読もう

教室で, Yomokka!で自由に読書をする時間を設けた。物語を読んでいる児童が多い。残り15分のところで, 教師から「みんなのランキング」コーナーに投稿したことがあるか質問し, 投稿の仕方をスクリーンに投影して全体で共有した。すでにランキングに投稿したことがある児童も, 初めての児童も興味深く聞いていた。3年2組の友達が投稿したランキングを見つけ, 「この本, 知ってる!」「これは読んだことがない。」と楽しそうにつぶやく姿がたくさん見られた。この時点で, 感想の内容や書き方については, 教師からはまだ特に指導はしていない。



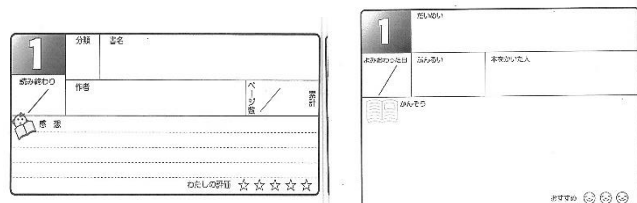
3, 4時間目 『人に伝わる文章って?』～修飾語を使って、文をくわしく書こう～

第1時の活動の続きである。発表したかったが時間切れでできなかった児童たちが「もっと言いたい!」「もっと違う修飾語がある。」と希望した。第1時では「花が、さきました。」だったが、



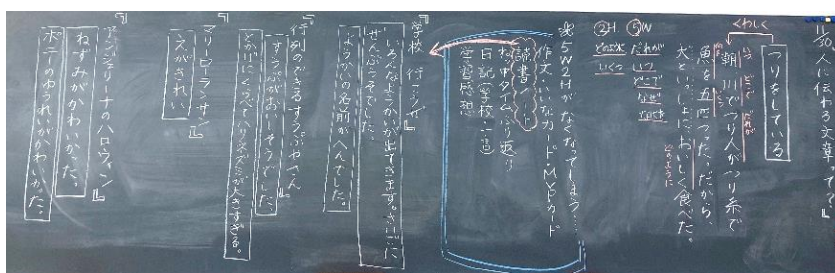
今回はすでに修飾語を二つ足した「赤い花が、たくさんさきました。」という文をさらに詳しく書き換えることにした。また、この文を自分の日記に書くとしたら?と想像してみることにした。「自分の日記」という条件を付けたことで、新しく児童から出てきたのは、「庭に」、「学校の中庭に」、「家のとなりの公園で」などの場所を表す言葉と、「今日」、「十一月三十日」などの日時を表す言葉である。今回も「いい香りの」、「きれいに」、「きれいでいい香りの」などの様子を表す言葉が出たが、まとめの時に、「日記には思ったことも書いている。」という児童の発言につなげて、様子を表す言葉からは「その人がどう感じたかも分かる」ということを共有することができた。

第4時では、これまで『人に伝わる文章って?』の時間に共有してきた修飾語について、教師から5W2H (how, how many) で説明した。次に、自分がこれまで文章を書いた様々な場面を思い出し、5W2H が使えていたかを振り返った。児童たちが思い出した場面の中に、メディアセンターで読書ノートを書く時があった。そこで読書ノートを読み返し、みんなの前で発表しても大丈夫という児童に、過去に書いた「ダメダメな文」(児童による言葉)を発表してもらった、「ようかいの名前がへんでした。」、「ねずみがかわかった。」とだけ書いて終わっている感想があり、物語の内容も、詳しい感想も全く伝わってこない文しか書けていない友達がいることが分かった。



中学年以上用(左)と低学年用(右)の読書ノート

発表を聞いていた児童の中には、「私もおんなじ!ダメダメ!」「俺もそんな感じ!」など、何故か嬉しそうに共感する児童が多数いた。ここで教師自身が気を付けたのは、発表してくれた児童には感謝を伝えることと、その「ダメダメな文」は過去の自分が書いたものだからこれから改善していけばよいことを一人一人にしっかりと伝えることである。



ここで教師自身が気を付けたのは、発表してくれた児童には感謝を伝えることと、その「ダメダメな文」は過去の自分が書いたものだからこれから改善していけばよいことを一人一人にしっかりと伝えることである。

5時間目 Yomokka! (ポプラ社) で好きな本を読もう

第2時と同様、Yomokka! で自分の好きな本を読み、5W2H に気を付けながら感想を書く時間とした。後半で、「みんなのランキング」コーナーをスクリーンに投影し、2組の友達が書いた感想を読み合った。この時、教師から5W2Hの観点に沿って、感想を価値づけた。ただし、全ての観点が使われていなくても良いことを確認した。

【メディアセンターの時間】

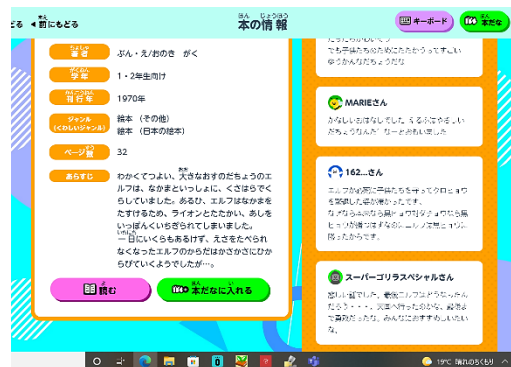
宮崎司書の提案で、Yomokka!の画面をスクリーンに投影して『かたあしだちょうのエルフ』の読み聞かせをしていただくことになった。感想も自分のパソコンを持って行きその場でYomokka!の感想欄に書き込む。(読書ノートに書きたい児童は、それでも良いことにした。)



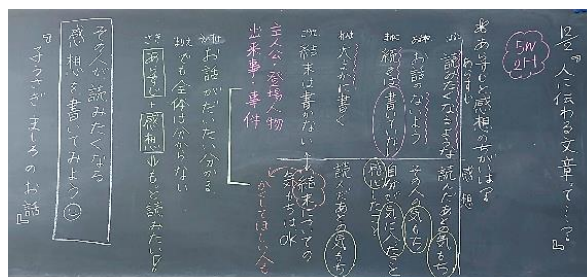
最後の5分間で、感想欄に書き込んだ感想をスクリーンに投影して共有していただいた。

6時間目 『人に伝わる文章って?』～あらすじと感想の違いは何だろう～

メディアセンターの時間に Yomokka! の感想欄に書き込んだ感想を、再度スクリーンに投影して共有した。「かなしいおはなしでした えるふはやしいだちょうなんだなーとおもいました」という感は、読んだ人の「かなしい」という思いと、「やさしい」という言葉でエルフがどのようなダチョウかが分かると価値づけた。また、「エルフが必死に子供たちを守ってクロヒョウを撃退した姿が凄かったです。なぜなら本来なら黒ヒョウ対ダチョウなら黒ヒョウが勝つはずなのにエルフは黒ヒョウに勝ったからです。」という感想は、エルフが「どのように」子供たちを守ったかが書かれていることと、そのことがあったからエルフを「凄かった」と思ったこと。つまり「凄い」と思った理由が書かれていることを価値づけた。(本来は本文に書かれている「根拠」と言うべきだが、5W2Hの中の「理由」という言葉で示した。)



次に、スクリーンを見ながらあらすじと感想の違いについて考えた。児童からは「感想は読んだ人の気持ちが書いてある。」、「感想には結末を書いている人と書いていない人がいる。」、「あらすじはお話の大まかな内容。」、「あらすじに結末は書いていない。」という意見が出た。教師から、「感想やあらすじを先に読んで、そのお話を読みたいと思ったことはありますか。」と問うと、大体の児童が「ある」と答えた。そこで、Yomokka!にある『子うさぎましろのお話』のお話を読み聞かせし、「その人(竹早小学校の他の児童)がお話を読みたいくなるような感想を書いてみよう。」と投げかけた。この時間では読み聞かせだけで時間が来てしまったので、感想を書く時間は次時に取りすることにした。



(ウ) 本時の計画 (8時間目/全9時間)

a. 本時のめあて

- ・『子うさぎましろのお話』の感想を読み合い、まだお話を読んだことのない人が読みたいくなるような感想とはどのようなものか考え、自分たちの言葉でまとめる。

b. 本時の展開

時間	○学習活動 ・ 予想される児童の反応	◇指導上の留意点 ◆評価 [評価方法]
導入 5分	○前時に書いた『子うさぎましろのお話』の感想について思い出し、本時の見通しを持つ。	◇これまでに共有してきた、5W2H と、感想にはお話を読んだ人の気持ちが書かれていることを確認する。
友達の感想から、「子うさぎましろのお話」を まだ読んでことがない人を読みたくさせる言葉を見つけよう		
展開1 15分	○Yomokka! で『子うさぎましろのお話』を読む。 ○そのお話を読んだことのない人が、読みたくなるような感想について考え、共有する。 ①交流する友達の感想を読む。(7分) ②グループの友達の感想から、お話が読みたくなる言葉を見つける。(8分) ・「気持ちがよくわかる」って書いてあると、共感できるお話なんだなって、興味をもってもらえそう。 ・「金色の種」という言葉が、「気になる」と思ってもらえそうだね。 ・ましろが心を入れ替えたことが書いてあるから、「いいお話だから読もう」と思ってくれるかも。	◇Yomokka! の感想を一覧にしたプリントを配付し、紙面で読ませる。 ◇言葉探しがすぐに終わったグループには、なぜその言葉がよいと思うのか理由も考えさせる。 ◇机間指導で児童が見つけたよい言葉を適宜紹介し、他の児童へのヒントとなるようにする。
展開2 18分	○お話が読みたくなる感想に書いてある言葉について、全体で共有する。 ・～さんの感想の「あんな木」という言葉は、「どんな木なのかな」と気になると思いました。 ひみつ ・～さんの感想に、「体の色が戻らなくなって」とあるから、自分で確かめたくなると思いました。 事件 ・～さんの、「金色の種」と「おもちゃがなる木」という言葉が、読みたくさせると思います。 ふしぎ	◇児童が発表した言葉を、 ひみつ 、 ふしぎ 、 成長 、 しっばい 、 事件 、などに分類し色分けや傍線で整理しながら板書する。 ◇前時までに出ていた観点について発言した児童についても、認めて価値付ける。 ・5W2H ・出来事の説明 ・結末についての記述 ・読んだ後の気持ち など
まとめ 7分	○本時の学習を振り返る。 ①感想を書く時に自分にとって一番大事だと思うことを発表する。 ②学習感想を書く。	◆お話を読みたくなるような感想には何が書かれているのか、自分の言葉でまとめている。 [発言・ノート]

(エ) 成果と課題

成果

本時では、共通教材「子うさぎましろのお話」を読んだ感想を小グループで読みあい、友だちの感想の中から“お話を読みたくなる言葉”を探して共有した。児童から出た「読みたくなる言葉」とその理由には、

- ・「プレゼントのなる木」「金色のもみの木」「うさぎが変身する」

…普通ではありえないことが書かれているから

- ・「悪い子がよい子になった」「(ましろが) 黒から白に」「雪の力すごすぎ」

…どういふことが気になるから

- ・「家に帰れなかった」

…ドキドキするから

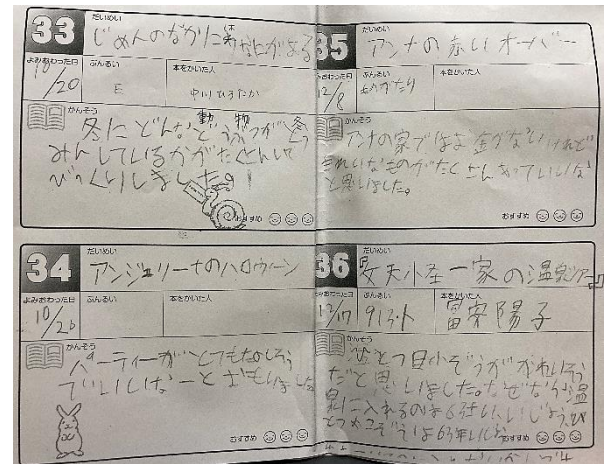
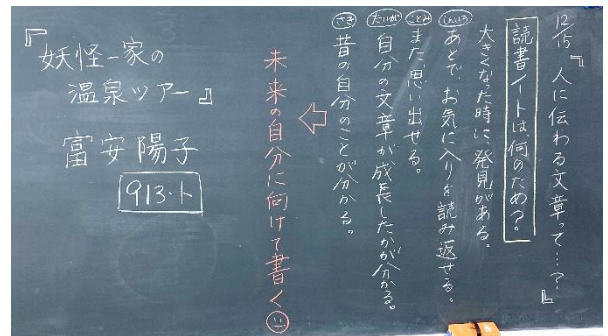
- ・「はらはらした」「よかった」 …その人の思ったことが書かれている・気になるから

などがあつた。また、友だちの感想の言葉「はらはらした」「よかった」を挙げた理由は、「その人の思ったことが書かれている」からであるが、その感想を書いた本人は思ったことの中身やその根拠について、あえて詳しく説明しなかつた、と発言しており、前時までの感想を書く立場から、本時では感想と物語を読む立場になって考えたことで、読者の興味を引き付けるような感想の言葉について、様々な視点から気づく姿が見られた。

今回、読書の記録を「Yomokka!」の感想機能を活用することで、自分が書く立場であるということだけでなく読者の立場にもなること、さらには自分以外の読者がいるということも児童たちにとって意識しやすくなったと言える。本時の発言を通して、児童たちが書いた感想からは、読者を意識して自覚的に説明する・しないを選択している様子もうかがえた。

本時を終えて次時は、『妖怪一家の温泉ツアー』（富安陽子）の感想を読書ノートに書く時間にした。これは、メディアの時間に宮崎司書が読み聞かせをしてくれたお話である。読書ノートは、普段、メディアの時間内に記入していたが、今回は教室に戻ってから児童が記入する時間を十分に保証したことで、感想をじっくり考えたり思い出したりしながら書く姿が多くみられた。

右に載せた児童の読書ノートは、左頁が本単元前、右頁が本単元中の記述である。この児童は書くことがそれほど得意ではないが、本単元が進むなかで文章量が増えている。「誰が」「何(を)」「なぜ」「どのように」(5W2H中の“WHO” “WHAT” “WHY” “HOW”)を意識しながら書くようになっていふことが分かる。



課題

本単元は児童たちの読書ノートの実態から着想を得て、その手立ての一つとして「Yomokka!」の感想機能を使用した。本来、メディアライブラリーでの感想欄への記入と、読書ノートへの感想の記入とでは、目的意識も相手意識にもずれがある。そのずれを無視したり埋めたり、すり合わせたりすることは、児童たちにとって自然な作業とは言い難く、両者は別物として扱うものだろう。このずれを解消するために、「Yomokka!」の感想

欄に記入するときは「そのお話をまだ読んだことのない人」、第9時で読書ノートに記入するときは「未来の自分」に向けて書くことをクラスで確認した。今後、それぞれの感想を記入するときに、誰に向けて何のために書くのかを、教師からその都度意識させる働きかけが必要だろう。

また、これらの読書の記録の蓄積が、児童の達成感や満足感を高め、読書への意欲向上につながるように随時振り返りの時間を設け、継続して指導していくことが必要だと考えている。

(文責：高須みどり)